



東九州支部報

第109号

公益社団法人日本山岳会東九州支部
2025年4月25日(金)発行



令和7年度定期総会 大分市ホルトホール (2025.4.19)

も く じ			
1. 支部活動		古典「山岳」拾い読み No7	13
支部定期総会「2025年度を迎えて」	2	より安全な登山のために(No57)	14
1 月月例山行 涌蓋山	3	こぎこぎ倶楽部山行 梓峠道	15
2 月月例山行 障子岳・古祖母山	4	こぎこぎ倶楽部山行 梓峠道	15
第3回シニアトレッキング 鎮南山	5	フンザへの旅(その2)	16
第7回 登山教室 黒岩山・三俣山	6	私の無名山ガイドブック・No96	17
アップスキリング扇山・恵比寿岩	7	低山歩きと天測点・子午線標の旅	18
アップスキリング宇土内谷・三段の滝周辺	8	蟠蛇ヶ森・牧野公園・御在所の峰を巡る旅	19
アップスキリング祖母山・すすこや大滝	9	バリ山行	21
アップスキリング・ハヶ岳	10	自然公園指導員研修会に参加して	21
2. 個人投稿		別冊noboro刊行	22
ペンリレー (第52回)	12	3. お知らせコーナー	23

「2025年度を迎えて」

支部長 安東桂三

4月19日(土)、東九州支部総会が開催され、多くの議事が審議され、2025年度の計画が承認されました。御礼を申し上げます。2025年とは、我々の日本山岳会にとって、記念すべき年です。日本における最初の山岳会として、1905年(明治38年)英国人ウォルター・ウェストンの勤めで誕生しました。そして本年2025年に120歳の誕生日を迎えました。この120年も続き、活動出来たことは、素晴らしいことだと思います。人の人生においても、120歳まで生きることは、難しいとされています。かつては、60歳を『還暦』と呼び、長寿をお祝いしました。そして、その倍の120歳を2回目の還暦を迎えたとし、『大還暦』と呼びます。

日本山岳会がその120周年を記念し、いくつかの記念事業を計画しました。その一つに、全国山岳古道調査があります。全国にある無数の山岳古道の中から120の古道を選び、調査し、将来に残すというものです。当支部は、国東半島六郷満山峰入りの道を選び、調査し、報告書を作成し、本年3月3日に日本山岳会のホームページに公開しました。これは、我々の住んでいる、また愛する国東半島が、日本山岳会々員を含んだ全国の人々が、それに触れる機会をつくったという事になります。我々の身近な国東の山々や霊場が、全国区になったことで、誇るべきこと、また責任あることとなりました。

この支部報が発行される4月末には、全国の日本山岳会々員が国東に集まる集中山行が計画されました。次号に報告しますが、全国の仲間と山に登り、酒を共にし、山を語らい、日本山岳会のクラブライフを楽しむことが出来ます。このような2025年、益々なる支部活動が出来るように、支部会員の協力をお願いいたします。



支部総会報告

ホルトホール大分(302号室)で開催された総会は、まず阿南寿範事務局長の司会で始まり、下川智子副支部長が開会の言葉、山岡研一会員が議長に選出され、総会成立が報告された。(出席者28名、委任状26名で、会員・準会員の75名の過半数を超え、総会成立)第1号議案、第2号議案と事業報告、決算報告、監査報告があったが、新大分百山(大分百山・三訂版)の経過報告では、2020年11月発行以来の最初の報告であり、委託販売先から、本の回収をし、支部在庫が258冊になったこと、収益が現時点で997,278円と報告された。これは、詳細を報告するようにと意見があった。

第3号議案の事業計画の承認の後、第4号議案の規約の改正提案に対して、多くの議論があった。これは、支部会友の年会費を3,000円から、5,000円に変更するもので、値上げの根拠は、本部の研修の交通費補助、役員会へ出席した役員への交通費補助、月例山行のリーダーへの僅かな謝金の原資にしたいと説明をした。また、本年は役員改選年であり、鹿島正隆副支部長、委員は大渡崇夫、丹生浩司、監事の浅野聡一の4名が退任となった。尚、新年度役員体制は以下の表記の通りとする

令和7年度 日本山岳会東九州支部役員体制

支部長 安東桂三
 副支部長 下川智子(シニアトレッキング兼務)
 副支部長 佐藤裕之(事業部兼務)
 事務局長 阿南寿範(総務部兼務)
 会計 平原健史(財務部)
 総務部 阿南寿範、中野稔、笠井美世
 事業部 佐藤裕之、佐藤秀二、廣瀬健一郎
 山行部 佐藤彰、櫻井依里、中野稔、田所歳朗
 山行部 (シニアトレッキング) 河野達也、下川智子
 遭難対策部 笠井美世、矢上将大
 広報部 中野梨絵
 監事 深草秀昭、神田美代子
 顧問 加藤英彦、飯田勝之、甲斐良治、興田勝幸

1 月月例山行

涌蓋山 (1499.6m)

清水久美子(会友178)

2025年1月26日(日) 快晴：涌蓋山縦走

1月の月例山行は涌蓋山から女岳、みそこぶし山、一目山までの縦走。涌蓋山は大好きな山のひとつです。山の形が独立峰でカッコいいところ、さらに山頂で360度の大パノラマのご褒美が待っているからです。そして今日は快晴。風は冷たいけど景色は期待できるなぁと思い、久々の涌蓋山山頂に思いを馳せながら、熊本県側のはげの湯登山口を朝8時過ぎに出発しました。

涌蓋山は一目山登山口から登ることが多く、こちらの登山口からの登山道は初めて歩きました。駐車した場所から林道を少し登ると涌蓋山の標識があり、すすきの中を進んでいきます。振り返ると万年山が視界の右側にパーンと見えます。すでに眺望が良いです。



すすきを抜けて再度林道へ、少し歩いてもう一度涌蓋山の標識に従って登山道へ。登って行くにつれて登山道に雪が。途中凍っている箇所などもあり、滑ると危ないのでアイゼンを装着することに。おかげであまり滑らずに登ることが出来ましたが、雪のない登山道よりも少し緊張して登るのが慎重になったり、普段アイゼンに慣れないためか、いつも以上に足が張って登りが少しきつく感じました。

木々を抜けて山頂近くで眺望がひらけると右の方向に目をやると奥に雲仙普賢岳がくっきりと。さらにそこから左に目をやると阿蘇の根子岳、高岳、中岳、杵島岳、烏帽子岳も見えます。とにかく周囲の山々がよく見えます。素晴らしい景色に元気をもらい、山頂まであと5分の標識に励まされ山頂へ。



山頂は期待した通りの大パノマ。先ほどは見えなかった雪を被った九重連山も見えます。山頂は、冷たい風が強く吹いていたので、景色を楽しんだら早々に次なる山、女岳を目指します。女岳に到着すると幸いなことに風がほとんどなく、日当たりも良いのでここで昼食を取ることに。皆、周囲の山々を眺めながら楽しくご飯をいただきました。

昼食後、次の山、みそこぶし山へ。女岳からみそこぶし山まで一旦下って少し登り返すのですが、途中雪が溶けたせいもあって下りの登山道の黒土が滑る滑る。女岳でアイゼンを外したことを少し後悔しました。ドロドロ道を下った後は気持ちの良い草原のような場所を通過しみそこぶし山へ登り返します。

この山頂でも寒いからかメンバー皆、長居せずにささっと本日の縦走の最後の山、一目山を目指します。一目山への最後の登り。そもそも急登できつい登りですが、雪がまだ残っていて歩きづらそう。よくよく先行しているメンバーを見ると登山者の皆さんが歩いたところでしょうか、部分的に雪がなくそこを歩いているようだったので頑張ってそこを歩くようにしました。何人かのメンバーは敢えて雪がある登山道を訓練と言われ登られていました。凄い。

本日最後の山、一目山山頂に13時30分前に到着。山頂からスキー場に目をやるとグレンデにはたくさんの人、駐車場には多くの車。この時期に一目山に登ることがなかったので人と車の多さにビックリしました。一目山からの下山道は雪もなく、登山道のコンディションも通常通りだったので大変歩きやすかったです。一目山登山口には、ほぼ行程表どおりの14時少し前に下山。今回の山行はお天気にも恵まれ、周囲の山々を見渡すことができ、普段ほとんど使わないアイゼンをつけての歩行練習もでき、良かったです。個人的

にはもう少しアイゼンをつけての雪山歩きの練習が必要だなと感じた山行でした。鹿島リーダーをはじめ、御一緒いただいた皆様のおかげで楽しく登れました。大変お世話になりました。



みそこぶし山にて

参加者・・・鹿島CL、中野(稔)、下川、佐藤(裕)、深草、笠井、河村、清水(久)、榎園、佐藤(美)、中島、井口、廣瀬、大前 14名

2月月例山行

障子岳(1709m)古祖母山(1633.1m)

矢野 貢(会友279)

2025年2月16日(日) 祖母山系縦走
 ・山行時間 11:30 ・距離 9.4km ・のぼり 1327m ・くだり 955m

憧れでもあった祖母・傾山群への登山が月例山行で計画されることがわかり「よし！挑戦しよう！」と気持ちが高ぶった。

ルートは尾平鉱山登山口⇒天狗岩⇒障子岳⇒古祖母山⇒尾平越トンネル登山口までの山行時間10時間が計画されていた。集合が原尻の滝朝5時と早い為、いつも以上に入念に準備し早めの就寝を心掛けたが興奮していたのか、寝付いたかと思ったと同時に目覚まし時計が鳴り起床、雨が激しく降っており少し気持ちが沈んだが軽い朝食を取り天気回復を祈りつつ車で自宅を出発した。

原尻の滝駐車場に着いた時点で小雨になり少し心も晴れた。4台の車に分乗し尾平鉱山登山口に向かった。尾平トンネルに車デポし、登山口では各自が暗い中最終の登山準備し、14人全員が揃った時点で点呼を行い標高600m地点から霧雨の中全員元気に出発した。奥岳川に沿って進み、吊り橋や沢を渡る際にはリーダーが皆に「苔で滑

るから慎重に、気を付けて」と声をかけながら黒金山尾根へ向かった。

順調に進行していたが、標高1100m地点を通過した位から日陰の所々に雪が見えはじめ、1200m地点を超えると登山道尾根の両端に積雪状態が見られるようになった。

標高1300mを超えると登山道も積雪状態となり、凍結した箇所も現れるようになった。リーダーから、アイゼンを持って人は装着するようにと指示が出た為、チェーンスパイクを装着した。ここからは雪上での慣れない歩行のため、雪道やアイスバーンでの歩行方法等のアドバイスを受けながら慎重に進むことになり、一気にペースダウンを余儀なくされた。

標高1400mを超えたあたりからは、新雪状態が続きリーダーは膝近くまで埋もれながら雪をかき分け一歩一歩確実に先導してくれた。私自身初めてラッセルを体験し、新雪の中進んでみたが両足とも膝まで埋もれ、手も使えず次に足を出そうとするも元の位置に滑り落ちる状況となり、ラッセルの厳しさを痛感し、雪山での知識経験が必要であると認識した。しかし真っ白な新雪や、壮大なつららの景色を眺めることで身体も精神的にも少しは楽になったような気持ちとなり、リーダーに何とかついていき、天狗岩までたどり着くことが出来た。

予定より約一時間遅れとなったため、障子岳で昼食予定だったが天狗岩で昼食をとり、短時間の休憩で出発した。昼食を取り少し体力も回復し天候も時折青空が見えるようになり、晴れやかな気持ちで全員が元気を取り戻し、声をかけ励ましあいながら雪道を交代でラッセル経験しながら障子岳に着いた。

水分補給と行動食を摂取し、全員で登頂写真を撮り古祖母へ向かった。古祖母まではガスの晴れ



障子岳 山頂にて

間に祖母や九重連山も見え隠れしていたが、景色を堪能する余裕もなく滑らない転倒しない様、足元を確認しながら前進し、全員が無事に古祖母の頂上にたどり着くことができた。

計画より1時間30分程度遅れた為、古祖母でも登頂写真撮影と若干の休憩で、日没までには下山したいとの全員の思いもあり早々と下山を開始した。

下山道は岩場の危険箇所もあるため、箇所々で「ロープは補助ですよ!」「全体重をかけては駄目ですよ」「三点指示ですよ」等、確実に実施するよう指示を受け慎重に歩行した。下山道もまだまだ凍結箇所もあり「ここ凍結してるから滑るよ」と声を掛け合い、一步一步確実に足を運んだ。途中からは雪解けのぬかるみ状態の登山道が多く「ぬかるんでから滑るよ」と皆で声をかけ合い細心の注意を払いながら進んだが、数人が転倒し靴も衣類も泥だらけとなる。悪戦苦闘しながらの縦走であったが、リーダーやベテランの方々の指導と皆の声かけで元気をもらい全員無事に日没までに下山することが出来た。

今回の登山は雪山という初めての経験と、多くの知識を得ることが出来た。リーダーはじめチーム全員に感謝します。有難うございました。



古祖母山 山頂にて

参加者・・・中野(稔)CL、鹿島、佐藤(裕)、佐藤(彰)、笠井、山村、中野(梨)、柳瀬、榎園、佐藤(美)、中島、山田、井口、矢野 14名

第3回 シニアトレッキング

鎮南山 (536.3m)

深草秀昭(会員16646)

山笑うにはちょっと早いと感じる鎮南山シニアトレイル山行記、東九州支部のシニア日帰りトレ

イルを2025年3月9日に臼杵市の鎮南山にて実施しました。

登山計画書では9時スタート、リトル鎮南山 9:40、8合目水飲み地蔵 10:00、塔ノ尾 10:30、山庵寺 11:30、ミツマタの森 12:30、ゴール 13:00ですが、健脚の皆さんでしたので、計画より40分程度早い行程でした。

「花粉症シニアの塊の山行す」杉花粉の最盛期の影響でしょうか、目はウルウル、鼻水ダラダラ、ハークションがあちらこちらにありました。

当日は臼杵市のミツマタを鑑賞する会のメンバーが、子供さん連れを含めて多くが山行していました。山道は離合待ちがあるほどでしたが、鎮南山を愛する会の御蔭で清掃が行き届いていること併せて、危険な場所には木杭に太いロープを通してあり、滑落防止柵となっているので非常に歩きやすく感じました。これは森林環境譲渡税を活用して施工されているとのことでした。



塔ノ尾にて集合写真

塔ノ尾で早目の昼食して記念写真撮影を済ませて、山頂へ行く組(16名)と山庵寺へ行く組(13名)とに分かれて、行動の後ミツマタの谷で合流して7分咲きの花を愛で、集合写真を撮る。近くには湧き水の水溜りに沢山の山椒魚の卵が産みつけられており、愛の交流によるものの光景に、生命の不思議を感じた次第である。

当日は何のトラブル、事故はなく無事に終了したことはリーダー、サブリーダーをはじめ参加者全員の献身の賜物と感じるところであります。

「山を愛し、自然を愛する人たちと出会って、笑顔で会話を交わすことで心が清められた山行である」と深く感じました。

当日の参加者の最高齢者は首藤宏史(89歳)さんです。故・日野原重明聖路加病院長は「若い

を創める」という新語を「老後という言葉よりも、老いを若返らせるという思いを込めて作られた」とのことです。老いの生き方、気合の入れ方が感じられる。つまり、情熱如何によっては生涯現役として、若者を凌ぐ生き方も可能であると思われれます。若さとは暦の年齢では無い、気の持ちようであると・・・実践されている首藤宏史さんを目の当たりにしたシニアトレイルの山行でした。鎮南山の詳しい説明は「登山ガイド 新大分百山』P168を参照頂きたい。

参加者・・・下川CL、笠井SL、首藤、興田、飯田(勝)、藤澤、櫻井、宮原、工藤、土屋、佐藤(裕)、深草、河村、長野、遠江、雪野、古谷(耕)、榎園、古谷(あ)、青木、飛高、佐藤(美)、丸井(弘)、丸井(元)、井口、土谷、宮川、大前、小山29名

登山教室 第7回

黒岩山(1502.6m)三俣山(1744.3m)

廣瀬健一郎(会員17415)

2025年1月11日(土)~12日(日)

別名「妖怪あずき喰い」の私が年間最重要行事＝鏡開きを諦める事はそう容易ではない。「本格的な県外雪山遠征用に入手した道具により、グググと減った銀行残高の隙間から吹く木枯らしはやがて来る春一番の使者なのだよ」なんと頼りない言い方で自分を勇気づけ、泣く泣く鏡開きに背を向け、登山教室同行の決意に至った。

昨年の研修は積雪がなかったが、三俣山から普賢岳も綺麗に見える晴天だった。今回は県西部や山間部に積雪予報。昔より少ないが十分だろう。11日 黒岩山、4時間30分 8015m 風なく穏やか、曇り。

9:30 九重ヒュッテ出発。県道へ向かう私道は凍結、軸足の体重移動で歩くが、滑るが転び方も技術。腕の良い樵が身体に持つのは只一つの大きな傷だけと昔読んだ事を思い出す。

11:05 牧ノ戸到着するや、何かを感じた支部長の表情は東九州中隊・安東別班の鬼軍曹の顔だ。無理せず様子を見乍ら進む判断は流石。コリコリと心の手帖にメモ(鬼軍曹はデリケート)。

東屋を過ぎて登り始めてアイゼン装着。靴との重さで爪が雪に食い込み、安定した足元は行儀良

い大型犬の仔犬みたく一定のテンポを刻む

「Good boy! 良いコだ」雪上ではリズムと妄想力を味方にしなければ。

12:15 黒岩山頂。樹々の霧氷が美しい。が造形美に耽る暇もなく強風の中素早く昼食後下山。下りはアイゼンを引っかけぬよう(両足の間に拳一つ)とメモ。牧ノ戸到着、支部長の雪斜面実習。ピッケル千通りの使い方の内いくつか実演。登り下りトラバースでの捌き、足の向き、滑落の対処。身振り手振り講習は続く(鬼軍曹はマエストロ)。



牧ノ戸からは県道を下り大曲から林へ、エヴァンゲリオン初号機のモデルとなった大杉が迎えてくれたら14:15 山小屋。

雪道では集中して歩き、やがて無心となりその無心の隙間から知らぬ間に色々な思いが滲み出る。また集中し無心となり何か溢れる。そんな濾過された「日々の泡」がとても大切でほぼその為に私は雪山へ向かう(初日の泡は柿本人麻呂だ)。

14:30 座談会

雪崩、勝手道、落雷、滑落、遭難、飢餓、話題は尽きず。特筆なのは家族への登山届だ。でない私は妻からの落雷、滑落、遭難、飢餓、離婚、寂しい老後、孤独死、恐ろしい。皆様ご家族へ届出お忘れなく。

なんと怖い想像は、なんと優しい温泉で癒され体の芯まで温まったら18:00 夕食。野趣溢れる味わい深い料理。柚子皮の甘露煮、こんにゃくの酢味噌和え、鹿刺し、シシ肉、踏の臺山菜の天ぷら、キノコ鍋、雑炊、大変美味。

中締め後2階布団に潜り込むが階下から酒宴の高らかな歌声と歓声は続く。ユダヤ教など一神教は人間を人間たらしめるのは『神を恐れる心』と説く。ならばこの酒宴も「山を愛する」より『山を恐れる心』による「そっちの世界に行くよ」と予めお知らせの神事なのか? そう思うと歌声は心地良い子守唄となり、ヒッヒッと時折啼く

ジョウピタキの声と共に優しい眠りへ導いてくれた。

12日 三俣 4時間40分 6300m

夜に止んだ雪は世界を白く覆う。風なく天候穏やか。朝食後7:10出発。大曲、砂防ダムを経た鉱山道路は強風で体感温度も下り、支部長ダウンを羽織る。私も薄着だがこの人は昨日から(ウールと思うが)下着、シャツ、セーターだ。多分平熱37.5度でインフル予防接種を体温測定で「今日はダメ」と毎回門前払なのだろう。が平熱の高さや薄着は免疫力を高める大切な要素だ。衣服調整も必要だが日常生活が重要だ。

8:35 諏蛾守越、アイゼン装着し三俣へ。果せるかな、山頂前はラッセル講習も可能だ。腰まで埋もれ歓声の受講生に手を貸し、冷静装うが心では新雪ヘダイブを夢想し「三俣のいけず」と白い息に隠して呟く。9:20 西峰山頂大変寒い。寒い故か本峰は行かず下山。ゴメン本峰。



三俣山 西峰 山頂にて

9:55 諏蛾守、少し道草し中宮祠跡を訪問。中岳麓の御池にかつて水源信仰の上宮、法華院に下宮、それを結ぶ北千里ヶ浜に祀った中宮は法華院方向右手山腹にある。地震で崩壊した祠は強風で寒々しいが、雪を纏う阿弥陀如来の却って逞しい姿に10:30合掌。

中宮を離れ、諏蛾守へ一寸の登りで足取りが重いのは、普段忘れがちなS37年冬の北千里遭難事故を参拝後でリアルに感じたからか。目線が先を急ぎ足元が疎かになる少し嫌な感じ。

「仏教の中道の教えよ」と中宮跡がそっと耳打ちする。足元の少し先迎りを中心に目を据えて遠くをボンヤリ捉える。「中道の少しだけ上、仏教の本分よ」と耳打ち。一神教も多神教も併せ呑む、山は懐が深い。

諏蛾守で一息つき鉱山道路を経て大曲。林の道で雪の下から覗く枯れ葉が見た目も感触もハーゲンダッツのクッキー&クリームだ。終りの名残惜しさで、もしや?と口にするがやはり雪と葉と土

の味がした。間もなくエヴァ大杉が見えたら山小屋12:00全員無事到着。昼食後13:30解散。

初パーティでの雪山、初山小屋泊、本当に良かった。皆さんに感謝。特に集団でのリーダーの意義は考える所が多く、次回「どんな集団・共同体なら生き延びる事が可能か:水戸ご隠居一行に見る集団論・リーダー論」で考察する(2日目の泡は水戸黄門だった)

支部 安東CL、佐藤(秀)、中野(稔)、佐藤(裕)、佐藤(彰)、他4名・受講生6名

① アップスキリング雪山

扇山・恵比寿岩

濱崎 哲也(会員 17339)

2025年1月25日(土)雪山を初級から学ぶ 雪山登山を目標とした登山技術習得の研修を実施した。午前は、扇山北斜面にてアイゼン、ピッケル、ロープワークの練習。初めてアイゼンを装着するメンバーもいたこともあり、斜面を歩くところから練習したが、慣れない歩き方に苦戦した。ピッケルは使い方が非常に多岐にわたること。全く使いこなせず、ただただ斜面に突き刺して杖代わりとして使えただけだった。学習、練習、慣れが必要と感じた。

昼食後、午後は恵比寿岩にて、アイゼンを装着した状態での岩登りを練習した。アイゼンが足の一部と感じられるように練習する、とのことだったが全く感じられず。一度引っかけた足先をどうしてもガリガリと動かしてしまっ、とても体の一部とは思えなかった。これも練習が必要だろう。前日に購入したピッケルとアイゼンの練習に挑戦したが、まず雪山に行けるとは思えない初挑戦だった。

研修を通して学んでゆきたい。服装:トレッキングウェア、防寒



ロープワーク研修中

着 持参した装備:アイゼン、ピッケル、ヘルメット、ハーネス、カラビナ、ピレイデバイス、レインウェア、飲み水等
 参加・・・安東、佐藤(彰)、上野、濱崎、廣瀬 5名



ロープにつながって同時登降



恵比寿岩で、アイゼンの爪先が自分の体の一部と感じられるようになるまでクライミング中



車で移動すること3時間弱、国道から県道へ、険道から酷道へとダブルプレイでツーアウトを取られ、ついには路面がアイスバーンとなっていたためスリーアウト。車を路肩に駐車し徒歩で移動。途中『大滝』というラスボスを見ないふりをしながら林業の県宮崎らしい伐採現場を過ぎて、約40分で『三段の滝』に9:50到着。

初めてのアイスクライミングなので、当然初めて見る氷瀑は一も二もなく圧巻だ。滝の真下に立つと頂点は全く見えない。ビルにすると15階は十分にある高さの凍った滝からは世界中の冷凍庫が一斉に開けられたような冷気がくる。いつも山頂や山腹に対峙して臨む気持ちとは比較できない緊張感。全然勝手が違う。

なんと整理のつかない気持ちは、クライミングが終わる頃にはなんとなく折り合いがついているのだろうか、そんな感傷に浸るヒマを与えてくれないのが山岳会の良いところである。

「とりあえず行けるところまで行ってみて」と初心者に対してこれ以上ないくらいの激励の言葉により、温まった心は図らずも目の前の氷を溶かしていき、更に緊張感を増大させることは理解してよ、と白い息に隠して呟き、第一歩を踏み出す。

アックスをキチンと刺しアイゼンの前爪をしっかりと刺す。「アックス、アイゼン、南無三点支持」自分なりのお題目を頭で繰り返す。

最初の1メートルほどの高さの段を乗り越えて、少し傾斜のゆるいポイントに至っても、なお怖さから中腰になることもできない。次は身長より少し高い段をなんとか乗り越えたら徐々に身体は暖まり、なんとなく楽しくなってくる。

一段を終えて一旦下ったのち食事。身体を冷やさないうちに次は二段まで。手のチカラは出来る

② アップスキリング雪山

宇土内谷・三段の滝周辺

廣瀬 健一郎(会員 17415)

2025年2月15日(土)アイスクライミングの基礎。古今亭志ん朝の「文七元結」は1時間をゆうに超えるまことに聞き応えのある大ネタの人情噺でとても好きな一席ではあるが、同じく志ん朝の「甲府い」というごくごく短い穏やかな噺も大変に小気味が良い。今回はそんな小気味の良い山行であった。

参加者7名、名簿では初めてお会いする方もいたが、なにぶん2月早朝5:30の大分市戸次のまだまだ明けやらぬ暗さと、カフェイン不足の寝ぼけた頭では皆さんの顔を判別することは到底できないまま、とにかくいつものように登山口への弾丸旅が始まった。

だけ温存し、推進力は足のチカラで得る。アックスを刺した点と両脚は二等辺三角形を描くこと。「脚力、二等辺三角形、南無キレイなフォーム」お題目を唱える。

13:00 クライミング無事終了し下山、17:00。大分市到着し、今シーズンまた行きたいなと思ひ解散。

どんなに傾斜がキツくとも、基本的な技術をしっかり踏まえることでかなりの確率で乗り越えることができる。クライミングはハイクに比較して、どちらかと言えばスポーツに近いだろう。入力と出力がダイレクトに繋がっている、巧拙を感じ取ることで成長に導かれる、そんなスポーツの本質に親和性を感じる。また、ただ登るだけで楽しめたのは、命を預かってくれたリードやフォローしてくれる人があってこそだ。いつの日かフォローやリードができるようになりたいと思ったのは、私が根っからの引きこもり系スポーツマンだからということもあるが、もう少し南、日向市へ行けば小倉ヶ浜という素敵なサーフスポットもある宮崎は稀有なウィンタースポーツエリアであること、さらには高千穂(山)から太平洋(海)へと続く自然の営みの中にある大きな流れが生む「場のチカラ」も少なからず作用しているのだろう。書いている文面にクライミングの技術的な内容は一切ないが、目を通された方が少しでもクライミングや落語に興味を持ってもらえたら幸いである参加者・・・安東CL、田所、上野、濱崎、廣瀬、橋本、他1名 7名

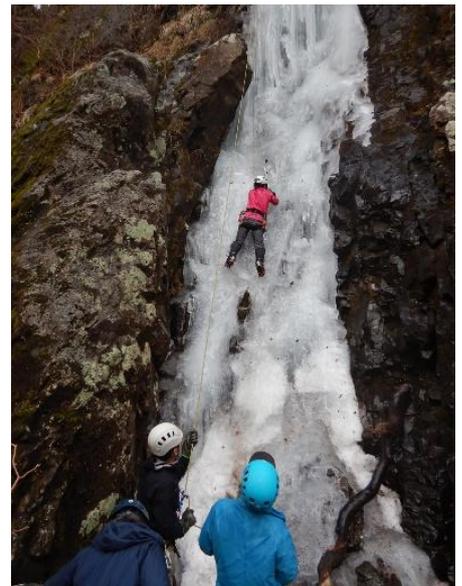


通常なら風穴コースか千間平コースというところだろうが、今日はアイスクライミングの研修なので、すずこや沢の大滝を目指した。林道から登山道(作業道?)に入り、何回か渡渉しながら進んだ。30分くらいして衣服調整で休憩。ここでリーダーからの突然の質問。

「今まで渡渉は何回?」と。振り返ってみると大きな木の橋と大きな沢は記憶にあるが・・・正解は4回だと。(そんなにあったかなあ?) 次の質問 「現在地は?」 地図を広げてみるも全くわからない!!

ただ前の人に付いて行く山登りしかしていなかった自分を深く反省。ここからは気を入れなおして必死に周囲を観察しながら登って行ったが、要所所でのリーダー質問にはお手上げ状態。沢が二つも三つも分かれ、しかも凍りついていた。

途中から爪アイゼンを装着しての歩行はつらかった。地図に二又(1230)右俣(1310)と表示された場所からさらに傾斜が進み、沢も交錯してますます進む方向が分かりづらかったが、リーダーの先導で大滝まであと3分の所までたどり着いた。ちょうど12時到着だったので、登山口から2時間かかっていた。



③ アップスキリング雪山

祖母山 すずこや大滝

大前京子(会友299)

2025年3月1日~2日(日) 大野川支流 大谷川支流 すずこや右俣 すずこや大滝研修

安東リーダーより地図をいただき大まかな説明を受け、霧の中出発した。中九州に入り大野町を通過する頃には青空も出て天気回復。北谷登山口駐車場に着いて、早々に準備、レクチャー後10時登山開始。

滝を見上げながら昼食をとり、その後リーダーと上野さんがロープのセットをしてくださり、安全確保をして一人ずつ研修が始まった。

みんなの垂直歩行を息をのんで見学していると、私にも順番が回ってきてドキリ。えっこんなことできないと思いながらも流れに逆らえずロープをつけてもらっていた。

一回目は見事にすぐに宙ぶらりん、二回目は少しコツをつかんだと思ったが、気持ちがいよいよ上に進めなかった。ピッケルを打ち付ける、もなかなか場所が定まらず、爪を突き刺す角度が難しく一〜二歩上がるのも必死。握力腹筋不足かも。流石に同行の皆さんは2〜3回挑戦して頑張っていた。

アイスクライミングを2時間半くらい研修して15時に下山した。

登山口駐車場に16時半に着き、テントを3張り設営し夕食の準備。

夕食をとりながら今日の反省と山談議他もろもろと話が弾み、盛り上がりました。夜は雨で、テントの中も少し濡れたり(他のテントはシュラフまで濡れたとか)したが、朝には雨も上がって少し晴れ間ものぞいていました。二日目は皆さんで検討したが、予定を変更して帰宅ということで現地解散。

冬山、アイスクライミング、テント泊と初体験ばかりでしたが、皆さんに助けられて何とか山行きを終えることができました。安東さんワインごちそうさまでした。朝食では佐藤彰さんが美味しいコーヒーを入れてくれました。ごちそうさまでした。

参加者・・・安東、佐藤(裕)、佐藤(彰)、上野、濱崎、廣瀬、大前

えるように脂肪を蓄える事には成功したが、アルプスはもとより初めて2000メートルを超える経験は、結果は自分自身の力不足を嘆く事となった。

今回はその「嘆く」ような負の感情は削ぎ、素人としてグレイトアマチュアリズムの体現者の視点からの報告としたい。

～概略～

3/19(水)19:00 別府出発⇒山口県美東 SA 22:00 到着。他の方と合流後に同場所で仮眠。

3/20(木)美東 SA を朝5:00 出発⇒諏訪南インターを経て19:00 長野県原村 船山十字路駐車場着。同場所にてテント泊。

3/21(金)5:30 行動開始⇒12:00 第一岩峰着後下山開始⇒15:30 船山駐車場着後 BC 撤収⇒駒ヶ岳 SA へ移動し仮眠。

3/22(土)朝6:00 OOSA 出発⇒20:00 別府インター解散。

20日(木)名神高速～京滋バイパスの渋滞はかなりの時間ロスであったが、ノロノロ進むかわりに車窓から見て取れるのは「外づらの良い京都」ではなく「私たちと変わらない地続きの京都」と感じられとても気分も良くなる。

中央道諏訪南インターを降り県道484号線は除雪しているが、県道を経た夕闇迫る駐車場へ向かう林道は当然除雪などしてない。轍はあるが20cmほどの積雪によりタイヤチェーン装着や狭小路のため対向車と離合できないなど小アクシデントにより到着予定時間をかなり過ぎ、広河原 BC を諦め駐車場にテント泊。

夕食は川村さん特製キムチ鍋。豚肉は口に含むとジューっと旨味あふれ且つアミノ酸をこれでもかと与えてくれ頼もしくも心優しい親方だ。もやし、人参などタップリの野菜は食物繊維はもちろん美肌効果も配慮の心遣いの細やかな美容ネエさんだ。そんな個性的な具材を包むスープは辛くて美味くて温かい。お尻の下が雪である事は既に頭がない。夕食を取りながら明日の予定確認。4:00 起床なので早く寝ないといけない事は全員が理解しているがお酒と話しも弾みなかなか場を離れ難い。それぞれがそれぞれに明日の事に思いを馳せながら狭いテントで過ごす風景はなんとなくゴチャゴチャしているが不思議な統一感もあり、

④ アップスキリング雪山

ハヶ岳研修

廣瀬 健一郎(会員 17415)

2025年3月19日(水)～22日(土) ハヶ岳
初級バリユエーションの実践

春のお彼岸を迎え絶賛増量キャンペーン中の私の体重はついに70キロの大台にのり、寒さに耐

とても居心地が良い事も床に就くのを遅らせる要因ではあった。

21日(金)朝食後5:30阿弥陀岳へ出発。トレースはある。「雪の朝 二の字二の字の 下駄のあと」である。トレースは昨日までのものと思われるが、江戸の時代も現代でも早朝の雪に思うことはなんとなく一緒なのだ。

BC予定であった広河原に7:00着。ここから一気に急登となる。雪が重い。九州の雪と違うのは当たり前だが体感するとよくわかる。仕事から東北など雪深い地域の方と話す機会が多く、その際に聞く「この時期の雪は湿気を含んで重たい」とはこの事か。

雪は益々深くなり間もなくトレースは消えラッセルとなる。私はラッセルに加わる事は出来ず大変申し訳なかったが、おかげでゆっくりながらも歩くことが出来、本当に感謝だ。傾斜は変わらず厳しく苦しさは増すばかりだか、右手に現れた権現岳の美しさは東の間の休息を与えてくれた。

「足の指で蛇を掴む」ように「リズムカル」にラッセルする事で後続がより歩き易くなると安東さんは言う。蛇嫌

いな私にとって、生きた蛇を頭から丸呑みにする事に比べたら、足で蛇を触るくらいはとて



も簡単な事ではある。など生意気な事を考えるも他のメンバーがラッセルしてくれる姿は、私の胸の奥の方にある柔らかな憧憬を不意に刺激し、静かな嗚咽は呼吸をより苦しめて困らずも自分自身を更に追い込んでしまい、雪に顔を突っ込みごまかすしかなかった。

10:30第一岩峰下へ到着。ここから2ピッチで登攀。自分の力で、というよりほぼロープで引っ張り上げてくれたと言った方が実相に近い。でも自分なりにピッケルとアイゼンと指と足の力と昨日のキムチ鍋と、そして引き上げてくれるメンバーを信じて、一步一步上がった事は本当に素敵な体験であった。もし映像があればただの釣り上げられたぐったりとしたクエのように映っているに違いない。黒澤明なら「無様」と呼ぶだろう、向田邦子なら「業」と呼ぶかもしれない、小津安二郎なら笠智衆の「あー」とか「うん」のセリフ

のみで優しく表現してくれるかもしれない。しかしどう呼ばれようとそれが私自身で、今回仲間がこんな私を受け入れてくれた事はすごく大きな救いであった。

12:00第一岩峰着、急に風が強くなり寒くなる。時間と状況を見てここで引き返す事となった。とても残念であるが後ろを振り返るとひととき大きな山があり、北岳と教えてくれた。阿弥陀岳山頂を臨む事は叶わなかったが遠くても北岳を臨む事もできたのは望外の喜びであった。

第一岩峰から2ピッチの懸垂下降。最後の降り際に身体が降られてしまいバランスを崩してしまった事が次回の課題だ。

下山途中、よくこんな雪の傾斜を登ってきたものだと思ながら感心してしまっていたが、それはもちろんラッセルで先導してくれたり、声をかけてくれた方のおかげだ。

技術はまだまだ磨ける、体力もまだまだこれからだ。なぜなら自分のこれからの人生にとって今日が一番若いからだ。

15:30駐車場到着、全員無事に下山。BCを撤収し帰路へ。

いつもは山中で色々な事が頭に浮かんでくるが、今回色々と考えたのは下山後だった。今後も一人で山行するだろう、でも誰かと行く事は決してやめる事はない、と思ったのはただの感傷からだけではない。リスクヘッジだけでもない。

厳しい山行も愛おしく思えるのは誰かのおかげなのだ。皆さん本当に有難うございました。



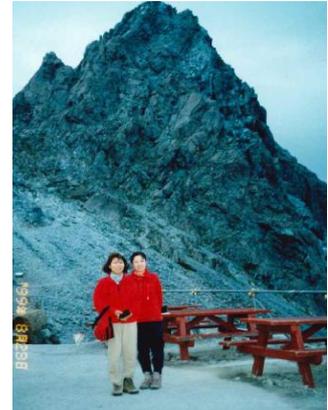
参加者・・・安東CL、上野、濱崎、廣瀬、橋本、川村(寅)、川村(美) 7名

個人投稿

ペンリレー・第52回

はじめての北アルプス～槍ヶ岳～

神田美代子(会員16235)



私の山との関わりは、娘の登山部入部をきっかけに、登山道具を買いに行ったサニースポーツでの西さんとの出会いが一番大きいと思います。若い頃から山岳に憧れていたこともあり、平成8年春頃だったと思いますが、会友として入会させていただきました。

それから月例山行に参加するようになり、県内や近県の山に登り始めました。日本百名山の本を読んでいるうちに、槍ヶ岳に登りたいと思うようになり、いきなり3000メートル越え大丈夫かな?と思いつつ、少々不安はありましたが登りたい気持ちが勝り、西さんに相談すると「上高地からなら大丈夫!」と言われ、娘と登ることにしました。

平成11年8月22日羽田空港で娘と待ち合わせ、松本駅に直行し、その日は徳沢ロッジに泊まりました。翌23日早朝に徳沢を出発して、午前中は軽快におしゃべりしながら、順調に歩きました。初めての北アルプスなので、心配よりもワクワクで、不安な気持ちはなくなっていました。一ノ俣あたりで、槍の頂が見えてきて、自分の目に映る槍は天を突くようにそびえていて感動しました。槍沢ロッジで、コーヒーを沸かしてひと休みしつつ、「これからだね」と話しました。やがて大曲からは、本格的な登山になり、急坂で道もジグザグして歩きにくくなりました。槍沢モレーンの辺りから、だんだんと体がふらふらして、吐き気や頭痛はするし、体がおかしいなと感じてきました。

とくにかく気分が悪い。大きな岩がゴロゴロしていて、そのうち一歩も動けなくなり、立っているだけでもきつくなりました。上を見上げると殺生ヒュッテも見えるし、槍の頂も見える。けれど、動けない。下山してくる人から「あと30分くらいだよ」と言われ、元気づけられました。見かねた娘が私のリュックを前に担ぎ、「ゆっくりでいいから、一步一步ね」と声を掛けてくれました。有難い! 少しずつ体が楽になってきて、上を見上げると、槍の岩壁に多くの登山者が張り付くように登っているのが見えました。「もうすぐ小屋だよ」と言われ、目頭が熱くなったのを今もはっきり覚えています。本当に大変な思いをした1時間半でした。やはり3000メートルの壁を超えるのは、大変だなと感じました。その日は、槍ヶ岳山荘で十分に体を休めました。

24日は、早朝から雨風で、目も開けられないような状態でしたが、朝5時45分に小屋を出発し、槍の山頂を目指し、6時40分着。360度何も見えなかったお陰で、怖くはなかったです。すぐに下山して、山荘を出て、上高地には午後4時に到着。2人で無事に下山できたことに感謝しました。この初めての槍の後、懲りずに2度も登りましたが、吐き気や頭痛を感じることはありませんでした。年々歳はとるものの、恐らく少しずつ体力がついたように思います。26年前の初めての北アルプスのつらい経験でしたが、一番思い出深い槍ヶ岳登山でした。

※ペンリレー・次回は 境 卓也 さん(16577)へお願いしました。お楽しみに。

JAC 古典「山岳」拾い読み No.7 耶馬溪を跋涉して裏道より彦山に登る

飯田 勝之(会員 10912)

「山岳」第九年(大正三年)第一号に掲載されている吉家實三(よしいえ じつぞう)氏記述のこの記事の紹介をしよう。

「九州の山水を談ずる者は、皆耶馬溪を説く。日本の山水を説く者も、亦耶馬溪を語らぬ者はない」で始まる紀行文である。「文名一代を壓する頼山陽が耶馬溪を激賞して、『耶馬の溪山天下無』と絶叫し、海内一と断定を下してからは、耶馬溪の山水は天下一といふ相場が決定してしまった。私は天然の風景を比較して漫りに優劣を付けることを好まぬ。耶馬溪も勝れた勝景ではあるが、假りに九州の風物と比較するも、阿蘇山、霧島山、桜島、由布山、九重山などある・・・」と山陽の評価が大げさ過ぎることを書いているが、

「けれども耶馬溪は面白い。兎に角一度遊覧する価値は充分ある。・・・比較的俗臭の少ない耶馬溪の遊覧をお勧めする。近来耶馬溪遊覧を目的とする軽便鐵道を敷設したりして、いらぬお世話を焼きつゝある好事家もあるさうで・・・どうかあまり俗

悪な設備を行届かせて、俗化させてしまはなければよいと大いに心配している・・・」と書いている。そうして、著名な耶馬溪の景勝地の散歩は省略して「別に隠れたる絶境、伊福谷と稱する支溪の存在することを紹介しておきたい・・・山陽が猪を煮て酒を飲みつゝ奇景を賞したといふ柿坂か



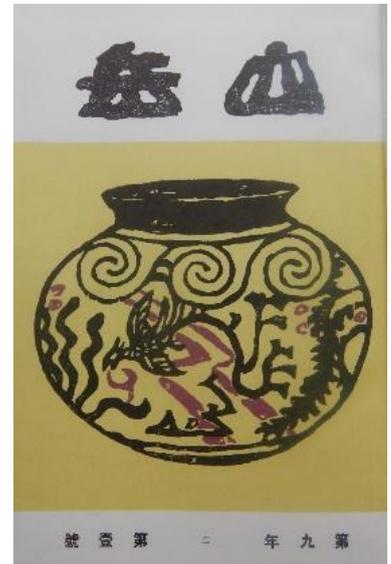
耶馬溪立羽田の景

ら支流に沿ひて」と深耶馬溪を経て「森町といふ二萬石の舊藩地なる山間の小都會に一泊して、翌朝伊福谷の道を問ひて上流から奇溪を賞しつゝ溪流を下るのが良い」と紹介して、今で言う「坂の上の景」「鶴ヶ原の景」「立羽田の景」を伊福谷三大奇勝として紹介している。中でも立羽田は「峠を踰え、屈折して下って行くと、右の方に浅い谷を隔てゝ小丘が長く連なり、丘上には殆ど名状すべからざる数塊の巖石が並立して居る、岩の裂罅から雅致に富んだ松などが躍り出て居る。・・・其前面には五、六軒の人家が、世界中で此處より平和な天地はないのだと云つたように構えている」と激賞している。筆者はこの後、伊福谷から山国本流にかけての流れに沿つた景色を「桃源的の趣は充分にある」と賞し「好山行々盡くるを恐る、流水語つて相隨ふ」といった唐人の句そのままに下って行って宮園八幡付近に投宿している。

翌朝は9時に宮園を出て「三里余りで森實に着く」とあり、豊後街道をそれて奥へ奥へと進む道を「彦山といふ戀人が私を待っている」「森實の上流二里ばかりの所に金鑛があつて年産十萬円ばかりあるとい

ふ」などと書いている。この筆者は明鹿野から高内を経て、刈又山の北の彦水川の谷を登って居る。今は林道が薬師峠まで通じているが、その頃は谷沿いの杣道であつたようである。「谷川に轉つて居る磊々たる巨石を跳り越たり、

溪水を渡したりして登って行くと景は益々神仙の趣が加張つて来る」と谷沿いに続く森林の美しさ楽しみながら「私は深い森林が好きで、如何にも現世を超越したような事物に取り囲まれて、思ふ存分自然を味ひ得る深い森林が好きで堪らない。太古から人間の征服を受けずに、生の自由を



號壹第 二 年九第

山岳・第9年3号表紙

享受している天然記念物、何といふ大きな価値であらう」「彦山裏山の森林は九州でも最も立派な森林の一つであらう」と当時の美林を賛美しているが、今ではこの谷沿いは殆ど植林地となっているのだ。筆者はこの日は豊前坊に泊まり翌日は一日雨で宿にこもり、その次の日に彦岳に北岳から登り、毛谷村六助が座禅を組んだと伝えられる巨巖の横を通り、山頂の社殿であるが、筆者は「彦山権現は随分信者があるらしいが、而し私の宗教は自然教だ。自然を歎美し、渴仰し崇拜していれば心が之に満足しているのだ」と、社殿の傍から見える豊後富士や耶馬溪の山々、九重山などを見て楽しんだあと下山している。

より安全な登山のために No.57 『先輩からのいただきもの』

安東桂三(会員 9193)

ここ最近、先輩たちから本をプレゼントされている。過去に1冊とか2冊とか、いただいたこともあったが、この頃は、多くの本をいただくようになった。

最初は、星子貞夫さんより、「岩と雪」の初期のころから、休刊になるまでのシリーズを。また、昨年亡くなられた甲斐一郎先生の家族より、山の本をもらってくれと、多くの本を。首藤宏史先生より、断捨離しているので、本を取りに来てくれと。加藤英彦顧問より、加藤数功氏のガイド本などを。

本会会員ではないが、HWさんより、山の本の復刻版を。私の知らない方からも連絡をいただき、本をもらったこともある。

多くの本を読みたいが、時間に追われ、時間の捻出が難しい。が、少しずつ読み進めている。世の中は情報があふれ、便利になったようだが、山の厳しさは変わらず、本質は変わらない。いただいた本の中から、一冊の本を紹介しよう。

『怪ひとつ(昭和57年発行)』折元秀穂著。折元氏はクライマーであり、本には阿蘇の鷲ヶ峰の登攀のことも書かれ興味尽きないが、オールラウンドプレイヤーの面もあり、多岐に渡って多く

の記述がある。昭和39年に記述された「夏山の心得」を以下に掲載。

『山は危険だといわれます。しかし実際には山が危険なのではなくて、山は危険な要素を多分に持っているが、そこに登る人間の側に危険性があるのです。遭難のほとんどが不可抗力的なものよりも、本人の不注意によるものとなれば、これらの遭難はわずかな注意によって避けえるものです。悪天候で荒れ狂う山の恐ろしさは、都会の生活では想像もされないほどきびしいものです。晴天に恵まれて、条件のよいときに楽々と登ったからといって、いつでもそうであるとは限りません。思いもかけない危険に遭遇する場合もあるので、いつでも非常のさいに必要な心構えと準備とを忘れてはなりません。岩登りを除けば、九州の山歩きでは、空腹と体を濡らさないように注意すれば、生命の危険はまずないといわれるほどですから、非常食を忘れないようにとくに留意したいものです。(以下、略)』

60年前に記述された文書だが、現在でも、通用する。私もまったくその通りと思う。世の中は情報化の世界で、多くの情報があふれ、それを信用した登山客が、山に入っている。自分の登山能力がどれくらいかは考えず、多くの簡単そうに登れる写メ、短時間で登れるデータを軽く信じることは、私はよく理解できない。

今シーズンは、バックグラウンドスキーの遭難が多いが、一つ気になった山の遭難事故があった。1月30日伯耆大山で二人の男子大学生が遭難したとのニュース。原因は「天候が悪くなり、視界不良で道に迷ってしまった」とのことだったが、情報を集めてみると、この二人は登山経験がなくいきなり冬山登山。かつ、登山開始したのが14時。山頂が17時。17時半くらいに視界不良で救助要請。6合目避難小屋に辿りついていたら、警察署員が救助に向かい下山したという事実だった。

まさに登る人間の側に危険があったと言われる。まずは二人にとって苦い経験だったと思う。死ななくて良かった。やはり不注意(?)、知らないということの怖さ、情報が多いゆえに山岳会に入らず多くのことを習わない個人、そのような問題が存在する。支部のメンバーには、多くの登山技術、登山知識を学び、正しい状況判断が出来るようにと願う。

こぎこぎ倶楽部

昔の峠道を探索しよう「梓峠道」

佐藤美和子(会友255)

2025年2月9日(日)

峠シリーズ4回目の今回の目的は豊後と日向を結ぶ街道(日向街道)のうち最大の難所とも言われる梓峠越えである。この峠は日向と豊後を繋ぐ重要な街道で大友宗麟が日向攻めに通ったり、延岡藩が豊後の飛び地を支配のために利用するなど、江戸末期まで使われていたそうだ。また、明治には西南戦争の舞台になるなど歴史ある道のような。地元では、かつては殿様も通ったとも言われている。

今回は、大向から梓嶺を通り、梓峠へ、下山は出発点の上流椎谷に降りる周回コースを予定した。

9日午前7時に道の駅宇目に集合。気温は-6℃と寒々としている。そこから出発点である延岡市北川町下赤の集会所前に移動する。ここは地域の広場で、ジブリ人形達がお出迎えしてくれた。北川の清流を見ながら10分程で登山口(峠への取付き点)に到着。年季の入った「梓山国境越え」の標柱がある。ここからいよいよ山道となる。

地図に沿って30分程歩くと一間弱幅の山道に出た。この幅であれば殿様のかごが通れたかとも思う。20分程で尾根に出て衣服調整。ここで、一人体調不調により、中野さん同伴で撤退。でも、下山口で最後まで待ってくれ、仲間同士の絆を感じる。更に10分ほどで296mの地点に到着し休憩。割と広く昔の人もここで休憩したことであろう。

ここからはなだらかで気持ちの良い落葉樹の道を快適に歩く。しかし次第に道は雑草が生い茂り、荒れてきたため古道を外れ山の稜線を登ることにした。30分ほど進んだが、このまま行くと梓嶺から離れた稜線となるため軌道修正し、旧道めざして再び下降。

しかし、ここからはこぎこぎ始まって以来(?)のものすごい藪が続く。足下ももろく、急斜面、背丈以上の密集したウラジロの中を降りていく。苦労しながら100メートルほど下がった

が旧道は不明であり、時間も一時間ほどかかってしまった。ここまでで、ほぼ予定の行程の1/4しか進めていないが、3.5時間ほど経過した。これ以上進むのは時間的に危険とリーダーが判断し、引き返すことに決定。元の稜線へとまた登り上がり、昼食をとる。帰りは、スムーズに2時間ほどで下山した。

今回は途中撤退となったが、もう一度反対側からでも挑戦しようとして皆で合意した。

かつては多くの村人や兵士達が歩いたであろう道は、廃道となり一部は探すことさえできず、静かな山の中に埋もれてしまった。道が荒れることの寂しさと諦め、でも、微かにわかるうちに歩けたことの喜びを感じる一日となった。皆さんご苦労様でした。もう一度梓峠越え捜しにリベンジしましょう。



参加者・・・飯田CL、阿南、中野(稔)、今川(美) 佐藤(裕)、中野(梨)、柳瀬、清水(道)、清水(久)、古谷(耕)、榎園、諸田、甲斐(英)、佐藤(美)、井村河野(浩) 16名

こぎこぎ倶楽部

昔の峠道を探索しよう「梓峠道」

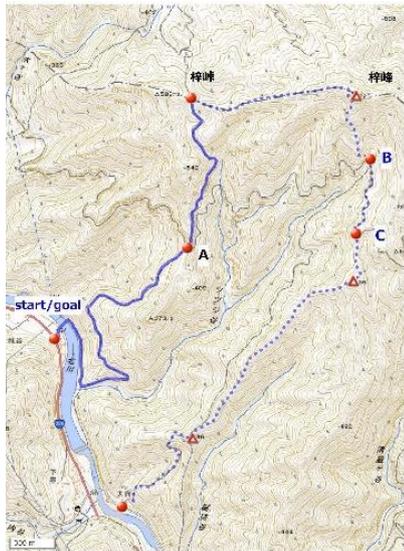
中野 稔(会員13997)

2025年3月16日(日) 雨・曇・晴

小雨の朝7時、唄げんか大橋に8台の車が集合。前回の探索では尾根の藪があまりに濃く、進退に困窮したため撤退を余儀なくされた。その反

省を踏まえ、今回は下山ルートを逆行する形でA地点を経て梓峠を目指すことにした。

7時半、依頼して北川発電所監視人宿舎横の駐車場に6台を止め、合羽を着て出発。椎谷大橋と書かれた橋を渡り、対岸の道路を南下。ツツジ



谷の沢の北側から荒れ果てた峠道に突入する。危険な場所もあり、緊張感が走るものの、9時30分、最初の目的地である林道鏡上赤線のA地点に到着。そこで、梓峠に至る山道を探すが、高いオープンカットで取りつく地点が見当たらず、とりあえず林道を上り、大向からの旧道が梓峠に続くと思われるB地点を目指す。

本日は、ここから登山というよりも、お花見を楽しむ遊山へと様相が変わる。アスファルトの林道を上り、10時20分、B地点(標高504m)に到着。ここで集合写真を撮って昼食をとる。仲間が持ち寄ったあいこのトマトが殊の外美味しかった。

11時過ぎ、下山開始。上ってきた林道を引き返し、登り着いたA地点30mほど下った場所に、梓峠への道と思われる尾根へ取り付くためのコンクリート階段を発見。今回はここまで車で乗り入れ、リベンジを果たす計画が出来上がった。

あとはひたすら上赤までの長い林道下りだ。淡いピンクの清らかなミツバツツジが、削られた岩の斜面に一輪挿しのように綺麗に咲いている。その姿は、先日鑑賞した津久見四浦半島の河津桜とは異なり、自然の生命力の逞しさを感じるものだった。その他にもイワヒバ(岩松):「岩檜葉」とも書き、花言葉は「実り」「負けない心」「長寿」、コシダ(小羊歯)馬酔木(アセビ)マムシグサ(強い有毒植物)梅(バラ科サクラ属の落葉高木)など、雨上がりの雫をまとい、瑞々しく輝きを放っていた。また、空を見上げると晴れ渡り明るくなっていた。

途中、三脚をたて望遠カメラを構えている方がい

たので、声をかけたらクマタカを撮影していた。レンズの中には、大空を悠々と舞うクマタカの姿が映し出され、その堂々とした翼の広がりや優雅な姿に思わず息をのんだ。まさに自然の偉大さを実感する瞬間だった。

13時半ごろ、駐車場に到着。その後、唄げんか大橋にて解散式を行い、本日の反省と次回への再リベンジを誓い解散となった。



広域基幹林道鏡上赤線・地図上のB地点で

参加者・・・飯田CL、阿南、中野(稔)、櫻井、今川(美)、佐藤(裕)、中野(梨)、柳瀬、清水(道)、清水(久)、平原(瑞)、榎園、甲斐(英)、佐藤(美)、土谷 15名

個人山行報告

フンザへの旅(その2)

飯田勝之(会員10912)

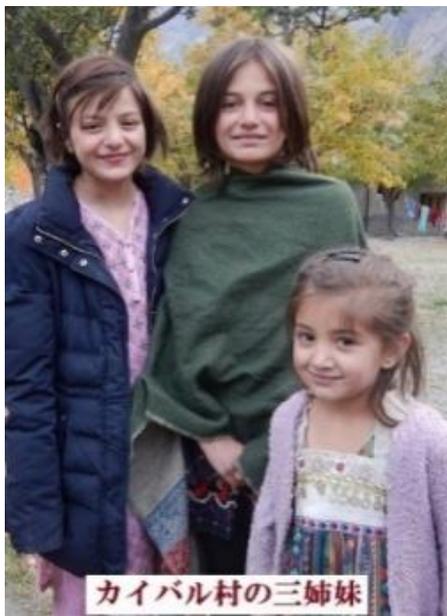
この地でもう一つ日本人にかかわる話がある。それは、アルプス三大北壁の冬季初登頂をなした長谷川恒夫にまつわる話である。彼は数々の登山歴を残しているが、フンザの地ではウルタルⅡ峰(7388m)の南西壁に挑んで、二度目の1991年雪崩に巻き込まれ、星野清隆と共に遭難死(43才)している。ウルタル連峰はカリマバードの背後に被さるようにそそり立ち、トレッキング中いつも晴れた空や雲間に見ることが出来たが、彼が常時滞在し愛していたそのカリマバードの村には、奥さんが彼の遺志を受けて1990年に学校を作り、その名も「長谷川記念学校」と名付けられている。我々がその学校を訪れた時には、日本からのお客ということで、校長がわざわざ出てきて

校門を開け、校庭に招き入れてくれた。そして、朝の教室に入って行く子供たちと手を振りあって挨拶が出来た。

その校門の上には「HASEGAWA MEMORIAL PUBLIC HIGHER SECONDARY SHOOL KARIMABAD HUNZA」と書かれていた。

カリマバードからさらに奥へと行くほどに、フンザの地が桃源郷と評されることの実感を得た。ポプラとリンゴの木々の中に石造りの家が点在するパスーの村を散策する時、親しみを込めた目で黙礼をしてくれる村人。さほど広くない草地の中に、のんびりと草をはんでいるウシやヤギたち。中国との国境に近いカイバル村に行った時、

リンゴ畑の木陰に寄り添って我々を恥ずかしそうに見つめる三姉妹や、狭い空き地で、皮でできた球をサッカーボールにして遊んでいる男の子たちの穢れのない素朴そのものの瞳に、言いようのない郷愁を覚えるのであった。



カイバル村の三姉妹

我が幼年期の村々の様子を思い出し、まるで時間が止まったまのような平和そのものの景色。その周りの山々は荒々しい岩肌と鋭く尖った幾千本の峰々、その背後に連なる白嶺、これぞ桃源郷の姿に違いないと思わされた。

春先のフンザは杏子の白い花が村々を彩るというが、私が訪れた秋のフンザは、村々を覆うポプラの紅葉と、畑や家々の庭先にたわわに実った完成した鈴なりのりんごの木々がみごとであった。

もうひとつ書いておきたいことは、カラコルム山脈を貫く道路、通称「カラコルム・ハイウェイ」のことである。この谷沿いはかつてのシルクロードで、唐代の三蔵法師(玄奘)も仏法を求めてこの谷間を、天竺へ旅した道であり、今もハイウェイ対岸の急峻な斜面の随所にその道跡も残っているが、このハイウェイなる道は、20

年前に梅木氏が訪れた時は未完成部分が多かったようで、いたるところで通行に難渋したとある。

しかし、今はほぼ全線がセンターラインのある完全舗装で、時速70~80kmで走れる道であ



右シスパーレ・左ウルタルの連峰 に向かって氷河のモレーンを登る

る。この道は中国の援助で造られたものだが、とりわけ、2010年の大地すべりで川がせき止められて、巨大な天然ダム(アッタバード湖)ができて、完成した道路が水没した後に7km程の二つのトンネルが新設されているが、この工事にも中国の資本力が投入され、トンネル出口には「LONG LIVE PAK CHINA FRENDSHIP/中巴友誼万岁」と大きく書かれた看板がり、天然ダム湖には中国が資本力にもものを言わせてホテルやボートなどの観光施設を造っており、パキスタンの辺地にも忍び寄る中国の影響力を感じさせられた。

(終わり)

私の無名山ガイドブック No.96

泥谷(200.8m)・泥谷(343.7m)・鶴の池(219.5m)

飯田勝之(会員10912)

今回は佐伯市の堅田川支流の大越川の下流を挟んで並ぶ三つの三角点の小ピークを紹介しよう。

泥谷(3等)

堅田川と大越川に囲まれた島状の小山のピークである。県道37号(佐伯蒲江線)の波越橋の150mほど先から右に入り、西野橋を渡って150mほど先に、戻る方向に鋭角に分かれる農道がある。農道は狭いので近くに駐車し、舗装の農道入ると入り口から400mほど先に四辻があり、これを左に入ると100mあまり奥にイノシシ避け柵のゲートがある。ゲートを開けてスギの植林地に入り、真っ直ぐに急斜面を登ると15分ほどで三角点から北東に派生する小稜線に至るので、

この稜線を南西に登っていくと、ゲートから約30分で三角点のある山頂に達することが出来る。標石のまわりは広く伐開されて東はスギの植林地、西はカシ、タブ、モチなどの灌木林である。

地形図：25000分のI・上直見

参考タイム：農道入り口→7分→ゲート→30分→山頂

泥谷(4等)

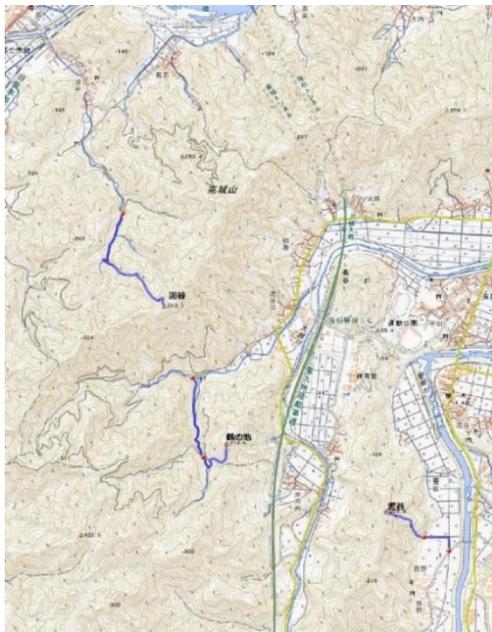
佐伯市街の南にある高城山の南の稜線上のピークである。国道10号線の門田バス停から東に入り、堤内川を渡り踏切を越えると須平の集落に入り、集落の真ん中を通り過ぎて最奥の分岐を右手に行き、天満橋の手前を、須平川に沿って上る狭い林道に入る。約700mで分岐があり、直進の道を行くが荒れているので、ここより歩くのがよい。途中は荒れたコンクリート舗装や崩壊地などを通して約30分で林道の終点となる。ここから左の小沢を越えてスギ林の急斜面を登っていく。約15分の登りで主稜線に達する。左(北東)に行くと緩いアップダウンの稜線が続き、ウラジロのブッシュを分けたりしながら行くと、稜線に出て15分で稜線上の鈍頂に達し、その中央に三角点がある。南はスギの植林地であるが、北は幅広く照葉混交林が残り、周りはシロダモ、ヒシヤカキ、アセビ、バリバリノキなどの低木である。

地形図：25000分のI・植松

参考タイム：林道分岐→30分→林道終点→15分→主稜線→15分→三角点

鶴の池(4等)

上記二つの泥谷に挟まれた小山である。県道赤木吹原佐伯線(603号)の泥谷口のバス停から集落の裏手を奥へ入る道を行くと林道となり、県道から約800mで橋を渡ったところがT字分岐で、ここを右にはいる。道が荒れているので車はここまで



で。はじめは谷添いの緩い登りで、次第に急になり約15分の登りで林道の終点。小型RV車ならここまで可。その先は三つの作業道が分岐しているが、一番左に入り、山腹を巻いて右に分かれるところを上っていく。途中に鹿避けネットがありこれをくぐって登り、作業道の終点からもう一度ネットをくぐってヒノキの成木林の急斜面を、ウラジロを分けて登っていくと、10分ほどのアルバイトで山頂である。南北に長い山頂の南の端近くに三角点がある。山頂は東の泥谷側が開いていた。地形図：25000分のI・植松

参考タイム：林道分岐→15分→林道終点→20分→山頂

低山歩きと 天測点・子午線標の旅

佐藤裕之(会員16315)

還暦の頃までは、低山にはあまり関心がなく、年に1から2度、3000m級の縦走をするのが楽しみであった。そんなわけで、ひととおり、南北中央アルプス八ヶ岳の主稜線を歩いてしまうと、山への関心も少なくなる時期もあった。

数年前から、田中陽希氏の三百名山人力踏破と吉田類の「ぼん百低山」放映に刺激を受け、歴史・文化・宗教・生活とのかかわりの深い中低山に登る意義によりやく気が付き始めた。

さて、恥ずかしながら、つい数年前までは、天測点・子午線標に関する知識は全くなかったが、6年前、同業者(土地家屋調査士)のN氏が、「姫島に天測点と子午線標を捜しに行くので、ついて来い。」と言うので同行したのが事の発端である。姫島に渡り、天測点確認後、春にアサギマダラの集まる海岸近くから、なたと鎌で里道を切り開き、藪の中に、忽然と聳える子午線標を発見したときは、その威容と崇高さに感動した。

(天測点・子午線標



八重山天測点

の意味について、過去の支部報に詳しいので、ここでは触れない。）



葛峰山子午線標

その時は、それで終わった面もあるが、2年前からこぎこぎクラブの山行の天測点・子午線標探しに同行するようになってから、天測点探しの面白さに取りつかれるようになった。そこで、全国の天測点・子午線標を全て訪れる計画を考えたが、どう考えても、途方もない夢にしか思えなかった。思いついたのは、全国の霊山、山城などの低山を訪ね歩き、その際近くにある天測点・子午線標を探索すれば、その全国踏破も可能ではないか？ということである。

現在、訪ね歩いた天測点は12点（昨年9点）、子午線標は10点（昨年7点）と、まだまだ少数だが、今のペースで行けば、全国踏破も夢ではないようだ。

天測点は一等三角点のすぐ近くにあるので、探すのは比較的、簡単だが、子午線標は周到に準備しなければ、遠方から来てたどり着く、というわけにはいかない。緯度・経度の分かっている子午線標は地図上で位置が確認できるが、それでも入口が分からなければ、探索には難渋する。緯度・経度の分からない子午線標は、あらかじめ先人の調査記録を確認する必要があるが、ネット空間をさ迷って先人の記録にたどり着き、地理院地図とグーグルマップ首っ引きで、子午線標の位置と探索経路を割り出すのは簡単ではない。子午線標の位置が分かっても、現地に行けば道もなく、ほとんど探検に近い。本州の山ならクマに遭遇する可能性もあり、熊におびえながらの探索となる（熊鈴2個と熊撃退スプレー必携！）。

こうして、子午線標にたどり着いたときの達成感・充実感は、言葉では言い表せない。

天測点・子午線標探しに加え、方位標（天測点設置の前に同様の目的で設置された。）、原三角点（現在の三角点網完成以前に設置された三角点）、経緯度観測点（ウェグナーの大陸移動説を検証するため、およそ100年前秋田県酒

田市付近に設置された）、菱形基線測点、磁気点、重力点など、訪ね歩きたい測量遺産・観測点は数えきれず、果たして寿命が間に合うか？

あと5年くらいは、北アルプスや南アルプスを歩けると思うので、そっちの縦走も楽しみつつ、全国の低山巡りをしながら、天測点・子午線標探しをすることを、大げさではあるが、ライフワークとしたい（忘れてた。日本100高山も。）。

最後に、傍から見ればあまり面白くも思えぬ山行に同行し、サポートしてくれている同伴者の協力がなければ、天測点・子午線標探しは困難なことである。ここに感謝する。



逢坂山菱形基線測点

蟠蛇ヶ森・牧野公園・ 五在所の峰を巡る旅

中野 稔(会員 13997)

2025年2月26日～27日 曇・晴れ
リーダーから「蛇年にちなんだ山に登って、早春の花・雪割桜・バイカオウレンを見に行きませんか」とのお誘いを受け、久しぶりの遠征ということもあり、楽しみにして参加を申し込んだ。いよいよ出発の日。2月25日、夜の別府港を23時50分に出航。真夜中の船旅は静かで真っ黒な海を眺めながら、八幡浜港には3時20分到着。眠気をこらえて車に乗り込み、2台の車列で八幡浜市街地を抜けて、高知へと国道197号をひたすら走る。トンネルをいくつか越えると、道は一変、雪道へ。スタッドレスタイヤにしておいてよかったと胸をなでおろす場面も。須崎市に入ると国道から分かれて田ノ道トンネルを経て、夜明け前のまだ真っ暗な狭い道を、曲がりくねってどん

どん上り、桑田山神社を過ぎて集落の奥へ。白いベンチが三つ並ぶ場所が登山口だった。

東の空がほんのり明るくなり始める頃、目の前には鉄塔が立ち、ベンチからは海が見えた。車の中で朝食を取り、6時半、鉄塔脇の登山道から山へ入る。杉の植林と竹林が交互に現れるジグザグ道を進み、40分ほどで舗装された林道に合流。さらに進むと、山道のショートカットが現れ、そこを登ると一気に視界が開け、展望塔のある蟠蛇ヶ森の山頂にたどり着いた。時刻は8時半。空は雲に覆われていたが、雲の切れ間から光が差し込み、須崎湾が柔らかく輝いていた。三角点を探したあと、蟠蛇ヶ森と書かれた特大の標識の前で集合写真を撮った。風が冷たいので一息した後、体が冷える前に舗装した林道をたんたんとして下る。

下山後、桑田山神社へと向かう途中、期待して



蟠蛇ヶ森山頂で

いた道沿いの雪割桜を確認するも、蕾はまだ固く閉じたまま。少し残念な気持ちを抱えながら、神社に到着。参拝を済ませた後、石段に腰かけて日向ぼっこの昼食タイム。無人販売の文旦をおやつにいただいたが、これが実に美味しい。ふと見上げると、鳥居の脇には狛犬の代わりに鷹の石灯笼籠。なんとも珍しい光景に思わず見入る。

雪割桜に後ろ髪を引かれながら、次なる目的地・佐川町へ。牧野公園に到着してまず向かったのは、金峰神社。長い石段を登っていくと、参道脇の崖に可愛らしいバイカオウレンの小群落を発見。さらに進むと、神社前の広場にもポツポツとわずかに花を咲かせたバイカオウレンたち。少し肩透かしを食らったような気持ちだったが、再び参道脇の花々を見て満たされた。

広い公園内をのんびりと散策。まだ冬の名残が色濃く残る中、ところどころに春の息吹が見られる。フクジュソウやセツブンソウの小群落が、園

内の静けさに彩りを添えていた。

そして、何よりも圧巻だったのが、最奥の杉林の中に広がるバイカオウレンの大群落。淡い光の中に咲くその白さは、まるで林の中の星のようで、言葉を失った。しっかりと目に焼き付けて、牧野富太郎の世界を味わい尽くす。

感動の余韻を胸に、今日最後の目的地・轟山へ。窪川町北部から林道を車で約4km登ると、山頂手前に到着。まずはアンテナの横にある三角点を確認。そこから子午線標を求めて西斜面を140mほど下る。南斜面の尾根近く、小灌木に囲まれて静かに佇む標識を見つけた時の達成感は格別だった。

27日翌朝、五在所の峰を目指し、宿を7時に出発。峰の上峠バス停から最後の登山スタート。登山口には「炭素固定の森」の看板があり、よく手入れされた山道を登っていく。上部には横木の階段が続き一歩ずつ進む。約1時間で山頂に到着。広々と



五在所の峰山頂の天測点を囲んで

かな山頂には一等三角点と天測点が立っていた。ここからの眺望は雄大な太平洋が一望できた。集合写真を撮り11時頃には、無事に下山した。

帰りの八幡浜港へ向かう途中、昼食をとった轟公園の高台にあった、石の風車が回るのを眺めながら、今回の旅の余韻にひたった。

参加者・・・飯田 CL、中野(稔)、宮原、今川(美)、中野(梨)、飯田(ひ)、榎園 7名



バイカオウレン



セツブンソウ



フクジュソウ



轟公園 石の風車

「バリ山行」

安部可人(会友11)

バリとは、バリエーションルート、兵庫県の新田テック建装という防水や外壁塗装専門の会社員波多が主人公であり、同じ社員のヤブ山専門の妻鹿(めが)単独行者が主人公でもある。舞台は厳しい六甲山系、会社のサークルで登山を再開した波多が、バリエーションルート歩きの妻鹿と付き合い始め、ヤブ山歩きに魅せられていく。妻鹿は社内では飲み会は欠席、誰からも声がかからない、孤立している(格好いい)。漏水対策が専門で淡々と業務を確実にこなしている。読者は一匹オオカミ妻鹿を追って、一気に読破してしまう。目立たず、不器用でおとなしい妻鹿。山行では、地下足袋、980円のウィンドブレーカー、ヘルメット、カラビナ、テープスリング、チェンスパイク、グローブ、マイナスイライバー(ロープ)などの装備です。あとは、ご自分でお読みください。安東支部長と岩場などの山行きを同行するUさんも読んだ、という。文中の要所を抜粋してみよう。

「、、、でもね。山に道なんかありませんよ。昔の人はこうやってルートファインディング、、、山に入って沢沿いとか尾根伝いに、歩けそうな径を探して歩いたんだよね。だからある意味でバリエーションルートが一番本来の山登りに近いね(重廣さんもそう言っていた)」

「バリはさ、ルートが合っているかじゃないんだ。行けるかどうかだよ。行けるところがルートなんだよ」

「登山道を外れたこんな場所に、隠されたこんな滝が、、、妻鹿さん、最高じゃないですか!バリ山行」「独りだからいいんだよ、山は」

ある事件後、波多と妻鹿は離れていく。この作品のクライマックスは、独りだちした波多がバリエーションルートに挑戦、ひたすら妻鹿の幻影を追いかける。読者は、ひょっこり妻鹿と出くわすのではと期待する。でも、見つけたのは、妻鹿の青のめじるしテープだけだ。妻鹿は社長と言い張って、自ら消えていった。

最後に、波多は実際単独行する作者自身であろう。作者は、加藤文太郎をイメージして妻鹿を登場させたのか、飛躍しすぎか。すごく魅せられる

男。なお、対談では、著者松永も建築会社勤務だが、辞めて作家生活では食っていけないと語る。本が売れない時代だ。

この場を借りて1つ自慢話。安部は80才まで、今はないサーフ泊で九州の名のある山城を7年間単独行している。山城とは、土だけの砦、近世の石垣城には全く興味がない。(文藝春秋2024、9月号)

『自然公園指導員研修会』に参加して

安東桂三(会員9193)

2025年1月21日、自然公園指導員研修会が、大分県生活環境部自然保護推進室の主催で開催された。本年の研修会は、希少野生動植物保護推進員との合同研修会であった。本支部にも指導員・保護推進員の会員が在籍するが、この研修には、甲斐英男、河津英基、私が参加した。

研修は3部で構成され、最初に大分大学工学部共創工学科自然科学コース、北西滋准教授の「水圏生態系の多様性と危機」講演があった。私は水圏については、専門外なので正しく理解難しいが、淡水魚「オイカワ」が、大分在来のオイカワでなく、遺伝的に異なったオイカワが増えていること。それは、かつて琵琶湖産の「鮎」の稚魚放流により、それに混ざっていた琵琶湖産の異なった遺伝子を持つ「オイカワの稚魚」が影響した。今では、養殖された「鮎」の稚魚放流で、それは防げている。大分県南と県北で、それが多く、県中部では、大分在来のオイカワが保たれている。生物多様性は、それはそれで良いことと思うが、生物多様性保全の難しさを学べた。

第2部は、「九重ふるさと自然学校の活動報告」をその代表である川野智美さんが行った。この学校は、セブン-イレブン記念財団が集めた募金で最初に開校した自然学校で、生活の継承、環境保全、などを目的としている。九重の自然保護保全のために「野焼き」の継承とその担い手づくり(人材育成)、草原のお花畑(60年前の草原環境を再生)、また外来種の駆除を行い、60歳以上の九重町住民から昭和30年代の暮らし方(自然を取り入れた衣食住)から、自然と向き合う、それらの多くを住民や子供たちに伝えること

を行っていた。多くのことを行い伝える難しさに感心し、我々も山登りだけでなく、そのフィールドを守り残すことをせねばと反省。

第3部は、この研修会の参加者をグループ分けし、「自然保護活動の輪を広げよう」をテーマに討論を行った。私のグループは、山の関係者が2人、国東ロングトレイルが1人、佐伯の方が2人、大分県自然保護推進室長の6名だった。まずは各人が何をしているかを説明し、それをどのようにテーマに結びつけるかとなった。が、各人が所属する組織(グループ)のメンバーが次第に高齢化し、メンバー数の減少となり、組織の存続運営が難しいと切実な問題提起があった。これは、どこも同じような課題であり、これを克服するために、組織間のつながりが必要で、組織間で依頼したり応援したりをせねばならないが、現在では、それが出来てないのでネットワークを作るべき、となった。最後にグループ毎に報告を行った。そこで同じようにネットワークについて報告するグループもあった。

自然学校の川野代表は、現在では、あまり強くつながることが好まれない世の中なので、緩く繋がるのが、継続につながるとアドバイスした。

上記が研修会の報告ですが、大分県が委嘱している自然公園指導員は令和5年度65名だが、次第に人数を増やし、令和15年度には71名と増やしたいと計画があります。支部のメンバーで、自分の登る山の自然保護、山に登る人への教育を考えている人は、自然公園指導員へ推薦します。検討、お願いします。

別冊noboro

「祖母・傾・大崩」刊行

安東桂三(会員9193)

昨年の春、西日本新聞社より、祖母・傾・大崩のガイドブックを発行したいと相談があった。A3で約130ページのガイド本で、ユネスコエコパークの山を紹介したいと言う。初心者より少しレベルが高く、かつ、中級向けの登山者が読める本を目指したい。2025年春の登山シーズンには、発行を間に合わせたい、監修を日本山岳会東九州支部にお願い出来ないかとのことだった。

昨年5月10日に開催された第1回支部役員

会で提案し、調査執筆、写真提供の協力者を求めた。下川智子、佐藤裕之、佐藤彰、笠井美世、上野展子、松村豊寛、井村ゆり子、そして安東が、このガイド本にかかわり、本年3月12日に発行された。

祖母・傾・大崩は、我々が日頃登る山であるが、2017年にユネスコエコパークに登録されたことの意味を新たに考える



きっかけになった。この登録は、世界に認められたことであり、世界に誇れるし、注目をもされている。この身近な山々を大切にしていきたいと思う。全国の有名書店、アマゾンなどの通販でも、購入出来るので、よろしくをお願いします。

昨年春に発行された「祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク 山のグレーディング」(祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク推進協議会)発行と共に、このガイドブックにも、日本山岳会東九州支部が監修したと記載され、それを見た登山者が、日本山岳会の門をたくことを期待している。

お知らせコーナー

支部からの報告(会務報告)

支部会議開催報告

第5回役員会 1月29日(水)

大分市西部公民館

1. 支部山行について
2. 山岳古道集中山行について
3. 次年度 山行計画
4. 大分百山販売について 他

第6回役員会 3月10日(月)

大分市西部公民館

1. 山岳古道集中山行について
2. 総会に向けての準備
3. 月例山行について ほか

第3回 支部役員会開催予定案内

日 時……令和7年5月9日(金)

場 所……大分市西部公民館 18:30~

支部ルーム開催状況

2月7日(金) 大分市西部公民館 出席者1名
 3月7日(金) 大分市西部公民館 出席者3名
 4月4日(金) 大分市西部公民館 出席者4名

支部ルーム開催予定

5月2日(金) 大分市西部公民館 18:30
 6月6日(金) 大分市西部公民館 18:30
 7月4日(金) 大分市西部公民館 18:30

支部からのお知らせ

第12回登山教室開催のお知らせ

山好きの知人友人などに受講を紹介してください

- ◆実施期間 令和7年5月から令和8年3月まで
- ◆定員 20人程度 ◆受講料8,000円
- ◆募集期間 4月15日(火)から5月2日(金)まで
 ただし、定員に達したときは募集を中止する。
- ◆研修の日程・内容等

▼第1回講座 5月15日(木) 座学研修 ホルトホール 403会議室

▼第2回講座 5月25日(日) 狛師岳・合頭山 山行 登山技術の基礎 花の山を楽しむ。

▼第3回講座 6月日程未定 座学研修 救急法講座

会員・会友等で未受講の方は受講してください。
 (会員・会友は無料)ただし、一般受講生優先なので、満席の場合は受講できないことがあります。
 申込先……佐藤 裕之 sa10@mail.goo.ne.jp

月例山行のご案内

5月例山行：くじゅう連山縦走

実施日……5月18日(日)
 所要時間： 13時間 距離約：22km
 (星生山～久住山～中岳～白口～
 立中山～大船山～三俣山)

集合場所：長者原ビジターセンター駐車場

集合時間：午前5時集合

参加申し込み期限……5月10日(土)まで

担当……佐藤 裕之

参加申し込み先……sa10@mail.goo.ne.jp

※地図 湯坪・久住山・久住・大船山 1/25,000

6月例山行：セツ石山

実施日：6月8日(日)

所要時間： 6時間 距離：11km

集合場所……山田湧水駐車場

集合時間……午前8時

参加申し込み期限……5月31日(土)まで

担当……鹿島 正隆

参加申し込み先……macpapa@kcf.biglobe.ne.jp

※地図 豊後豊岡・杵築 1/25,000

7月例山行：文珠耶馬(文珠山)

実施日：7月13日(日)

所要時間： 6時間30分

集合場所……文殊仙寺駐車場

集合時間……朝8時

参加申し込み期限……7月5日(土)まで

担当……鹿島 正隆

参加申し込み先……macpapa@kcf.biglobe.ne.jp

※地図 香々地 1/25,000

シニアトレッキング

第一回 指山(1,449m)

実施日……6月1日(日)

所要時間： 5時間

集合場所：長者原ビジターセンター駐車場

集合時間：午前9時

参加申し込み期限……5月20日(火)まで

担当……下川 智子

参加申し込み先……笠井 美世 mmykasai@niffy.com

※地図 湯坪 1/25,000

2025年度研修山行 リーダー育成研修事業

アップスキリング登山

- ・アップスキリング岩登り(正しい岩登りを知る)
- ① 4月20日(日) 由布岳 観音岩
- ② 5月10日(土) 国東半島 鬼城バリュエーション
- ③ 6月14日(土) 比叡山
- ・アップスキリング沢登り(沢登りを初級から学ぶ)
- ① 7月5日(土) 八面山(金色溪谷)
- ② 8月2日(水) 奥岳川(サマン谷)
- ③ 9月13日(土)～15日(月) バリュエーション(目的沢は後日) 初級から学び、中級の沢登へ結びつける。
- ・アップスキリング雪山(雪山を初級から学ぶ)
- ① 11月8日(土) 高崎山大谷 その1

- ② 11月30日(日)高崎山大谷 その2
 ③ 2016年1月10日(土)~12日(月)バリエーション(目的山は後日)
 ・少しでも登山技術を伸ばせば、山の世界が広がります。登山道具の相談にも応じますので、参加希望の方は、お早めにお願ひします。
 参加申し込み…安東 桂三 090-5727-9472
keizoando@xa3.so-net.ne.jpまで

新人会員の紹介

- ・会 員 廣瀬 健一郎 会員番号 17415
- ・会 友 川津 真寿美 会友番号 301
- ・会 友 矢野 哲 会友番号 302
- ・会 友 上妻 由佳 会友番号 303
- ・会 友 森迫 誠二 会友番号 304
- ・会 友 比良 昭一 会友番号 305
- ・会 友 鈴木 道雄 会友番号 306

会費納入のお願い

支部は皆さんの協力で成り立っております。
会費のお支払いがまだの方は、速やかにご納入
くださいますようお願い申し上げます。

銀行名 ゆうちょ銀行

口座記号番号 01970-7-16789

口座名義 日本山岳会東九州支部

登山計画書の提出

安全で安心な山行のために、登山前に登山計画書を提出しましょう。

提出先…遭難対策部 笠井美世

mmykasai@niffy.com

後 記

- ・山道を歩くのはもう長年慣れっこになっている私だが、しかし舗装道路を歩くのはもう長年ご免被って、ちょっとした距離でも車に乗って動いている昨今だ。思えば、かつては舗装道路だろうが、砂利道だろうが目的の所まで歩いたものだが。
- ・そういえば、林道歩きが一番の思い出は宮崎県の掃部岳に登った時だ。深年林道の鎖のゲートからの林道歩き、これは半端なものではなかったのだ。深年川に沿ってひたすら歩きの約14km、2時間半近くかけてやっと掃部岳登り口に着いて、

そこから掃部山に登って下山後も、同じ林道に戻った記憶がある。

- ・山で初めて山ヒルに喰われたことよりも、長い林道歩きのダメージの方が私には記憶にある。そうだ、その時に、マウンテンバイクで上って来た男に追い越されて「そうか、その手があったのか」と思った記憶もある。
- ・その後も、山歩きにはつきものの林道歩きは数えきれないほどだったが、どの度も私には苦痛だった。そう言えば、吉部から登った平治岳からの下山時に、山友の提案で、面白半分で大船林道を歩いたが、途中で大変後悔した記憶もある。
- ・舗装道歩きの多い国東の古道踏査を、二回にわたって歩き通した方には、私は本当に尊敬に値する。3月26日、二度目の古道歩きの最後の踏査で、瑠璃光寺から両子寺までの仕上げに参加した時には、舗装道歩きの嫌な私に、何故か不思議な満足感があった。皆さんの気力のおかげだ。
- ・毎年3月末から4月始めに見える山肌のヤマザクラ。まるで山腹にワタガシをちりばめたように無数に点在し、一年でこの時分でしか存在が知られないヤマザクラ。我が家から見たら、4月10日ごろには向平山の山頂付近まで、ワタガシは消え周りの緑と同化して姿が見えなくなりました

(K・I)

- ・支部報の原稿、次号の締切は6月末です。

zermatt1111nm@gmail.comまで

- ・原稿の文字数は長過ぎないように・・・

1,600字(原稿用紙4枚)程度以内でお願いします。そうすると、手ごろな読みやすい文章になります。個人投稿もお待ちしております。(M・N)

公益社団法人日本山岳会東九州支部 東九州支部報 第109号

2025年(令和7年)4月25日発行

発行者 安東桂三

編集者 中野稔 飯田勝之

発行所 事務局

〒879-1113 大分市中判田15-55 阿南方

TEL・FAX 097-797-7120

E-mail beca5844@oct-net.ne.jp